

教育史におけるオーラル・ヒストリー研究の動向と可能性

江 口 怜

1. はじめに

本稿では、まず近年隆盛しているオーラル・ヒストリー研究の動向を確認し、そこで提起された論点を「記憶」、「歴史叙述の主体」、「オーラリティ」をキーワードに読み解いていく。その上で、教育(史)学におけるオーラル・ヒストリーの動向を、その3つのキーワードとも関連付けながら紹介し、最後にそうした諸点を踏まえた上で、教育史の中にオーラリティを掘り起こしていくことの意義について若干の考察を加えたい。

2. オーラル・ヒストリー研究の隆盛

日本におけるオーラル・ヒストリーの研究史については、桜井厚による簡潔なまとめがある。民俗学には古くから聞き書きの伝統があり、柳田国男による早い時期からの文献史学批判と口承文芸への注目があつたが、本格的にオーラル・ヒストリーが歴史学の方法論として議論され始めるのは、民衆史・社会史研究の台頭を経た1980年代後半である。そこでは民衆の生き様やディテールを叙述する上で口述史料¹⁾の意義が語られ、特に女性や戦争体験者、被差別者、先住民等のマイノリティの語りに注目が集まった。しかし、その後の「歴史の事実とは何か」を巡って交わされた実証主義歴史家、修正主義歴史家²⁾、構築主義の立場に立つ歴史家らの論争の中で、オーラル・ヒストリーの進展にはブレーキがかかったと桜井は評している。とはいえ桜井も記しているように、2003年のオーラル・ヒストリー学会の立ち上げもあり、オーラル・ヒストリーが広く定着しつつあることは疑いえない³⁾。

19世紀にレオポルト・フォン・ランケが確立した実証主義歴史学は、文書史料が存在しないところに歴史はないとして、口述史料の価値を認めてこなかった⁴⁾。オーラル・ヒストリーが一定の位置を占めるに至った現在においても、口述史料は文書史料よ

りも価値が低いと見なす見方は根強い。そうした見解に対して、「口述史料を扱う技術が、歴史家の評価基準でなくなったのはごく最近のことにすぎない」として、古代ギリシア以来の口述史料を用いた歴史叙述の長い歴史を示し、オーラル・ヒストリーの再興に貢献したのがポール・トンプソンであり、その著作*The Voice of the Past* (1978年、邦訳『記憶から歴史へ』2002年)は、既にオーラル・ヒストリー研究における古典の位置を占めている⁵⁾。

トンプソンの議論は、1987年に歴史学研究会の機関誌『歴史学研究』が初めてオーラル・ヒストリーに関する特集を組んだ際にも言及されたが、翻訳者の酒井順子を中心に2000年代に入ってから積極的に参照され、日本の歴史学におけるオーラル・ヒストリー研究の活発化を促した。しかし、日本の場合、桜井厚を筆頭に社会学のライフヒストリー／ライフストーリー研究の盛り上がりがあり、歴史学の議論を後押しした側面が大きかった。社会学のライフヒストリー研究は、1920年代にシカゴ学派の研究手法に起源を持つとされ、一時期の退潮を経て、1970年代に世界的に再興したとされる⁶⁾。その同時代に発表された中野卓編著『口述の生活史』(1977年)⁷⁾は、日本における口述史料を用いたライフヒストリー研究の嚆矢として位置づけられている⁸⁾。

しかし、実際には「オーラル・ヒストリー」という言葉が広く用いられる以前から口述史料に関心を寄せてきた分野は少なからずあり、視点を広げると様々な水脈を掘り当てることができる。例えば、倉敷伸子は「歴史の分野の中で女性史という領域は、オーラル・ヒストリーを取り入れた叙述の先駆けをなした」として、丸岡秀子『女の一生』(1953年)、森崎和江『まっくら』(1961年)、山崎朋子『サンダカン八番館娼館』(1972年)等、様々な作品が存在したことに注意を促している⁹⁾。また、「底辺」や「被差別」に着目する中では、『日本残酷物語』全5巻(1959-1960年)、石牟礼道子『苦海浄土』(1969年)、柴田道子『被差別部落の伝承と生活』(1972年)、小

林初枝『被差別部落の世間ばなし』(1979年)等の聞き書きを取り入れた多数の作品が編まれている。また、戦後一貫して民衆思想・大衆文化に関心を寄せ続けて来た思想の科学研究会の取り組みの中にも、『私の哲学』(1950年)や『現代人の生態』(1953年)、『語りつぐ戦後史』(1969-1970年)等、「語り」の中からその哲学や文化を読み解こうとする流れを見て取ることができる。さらに、このような民衆やマイノリティの語りに注目する潮流とは別に、御厨貴らによる政治史におけるオーラル・ヒストリー研究の流れも見逃せないだろう¹⁰⁾。

以上見てきたように、アカデミズムを超えた草の根的な広がりを持ちながら発展してきたオーラル・ヒストリーについては、定義や方法論を巡って確固たる共通認識が確立されているとは言い難いが、『労働者と農民』(1976年)執筆以来口述史料の活用に意欲的であった中村政則によって、次のような概念整理の試みも行われている。まず、「聞き取り」は「話し手の体験、記憶などを聞き取ること」であり、この作業は「語り手、聞き手の協同作業」であり、また「人間の全存在をかけたコミュニケーションの一形態」でもある。そして、聞き取りの中身について、「それを整理し、ひとつのまとまりある語りとして編集したもの」が、「聞き書き」であり、これは「資料化」の実践である。そして、「資料化された聞き書きをもとに、歴史叙述を行う」ことが、「オーラル・ヒストリー」であると、中村は規定している¹¹⁾。

成田龍一は、等閑視されがちであったオーラル・ヒストリーの「ヒストリー」の部分、つまり歴史叙述を巡る議論を中村が提起したことを高く評価し、そこに「歴史学の刷新」の可能性を見ている¹²⁾。こうした指摘を踏まえ、次にオーラル・ヒストリー研究の隆盛の中で提起された問いとして、「記憶」、「歴史叙述の主体」、「オーラリティ」の3つの論点について考察したい。

3. 記憶・歴史叙述の主体・オーラリティ

まず、歴史と記憶の問題を巡っては、既に多くの議論が積み重ねられている。成田龍一は、オーラル・ヒストリーの隆盛の背景に、「記憶」の時代における「歴史叙述を巡る問題系—「事実」とは何か、またそれはいかに記述されるのか。個々の体験は、誰が、誰に對しいかのように意味づけ記述するのかなど

といった一連の問いの噴出に即応した事態¹³⁾を見出した。成田によると、「記憶」とは「体験／証言／記憶」の三位一体の様相をさし、「戦争の記憶」を巡って、1950年代を中心とする「体験」の時代、1970年代を中心とする「証言」の時代を経て、1990年代以降は戦争の直接の経験を持たない人々が多数を占める「記憶」の時代に入っている。そして、「証言」の時代に現れた「事実」の解釈を巡る論争は、保守／革新ではなく歴史における構成主義／本質主義という新たな対抗軸のもとで「記憶」の時代においてより顕在化していく。そうした認識の上で成田は、「戦争という主題に即しながら「戦後」それ自体を再考すること」が、記憶の時代の課題だと指摘している¹⁴⁾。

ポール・トンプソンの著作の邦訳タイトルが原著とは異なる「記憶から歴史へ」とされたのも、オーラル・ヒストリーがまずもって個人の記憶を聞き取るという営みによるということへの関心が集まっていたからであろう。そして、成田龍一の整理からもわかるように、「記憶」はまずもって「戦争の記憶」、つまりもうすぐ敗戦から70年を迎えようとしているアジア・太平洋戦争、第二次世界大戦という経験を巡って主題化されてきた。そしてまた、沈黙し続けてきた「従軍慰安婦」であった人々が語り始めたことが「記憶」の主題化に大きな役割を果たしていたように、「記憶」を歴史学の主題として捉え返す営みは、アカデミズム歴史学が「主観性」のレッテルを貼ることで考察対象から除外してきた普通の人びと、特にマイノリティの「記憶」からいかに歴史像を刷新しうるのか、という課題を提起したのだった。

このように、「記憶」を巡る問題は、「歴史叙述の主体は誰か」という問題へと結びつく。オーラル・ヒストリー研究の方法は、原則的に叙述の対象との対面、そして対話という過程が織り込まれている。桜井厚は、自らの立場を「対話的構築主義」として、ライフストーリーが語り手と聞き手の相互作用の中で構築される「共同制作の産物」であることを重視しているが、こうした相互作用的側面の一つの特徴は、「語り手を歴史を構成する一員とみなすこと」であり、また「歴史家もその一員として歴史叙述の登場人物となる」ことである¹⁵⁾。つまり、これまで実証的・客観的な「歴史的事実」の認定と叙述を特権的に占有してきた歴史家の立ち位置(ポジションナリティ)自体が、対話のもう一人の主役である語り手

との関係の中で問い直されることとなったのだ。

既に述べたように、オーラル・ヒストリー研究には、種々の権力関係・差別的関係の中で被抑圧者の立場に置かれたマイノリティの語りから、「歴史叙述の主体」は誰かを問い、歴史像の再構築を試みる指向性が強い。しかしそれだけでなく、保莉実や清水透のような人類学的フィールドワークの手法を交えた研究の中からは、文字文化とは相対的に離れたところで暮らしを営む人々の「歴史実践」を見つめる中で、歴史（家）観を問い直す問題提起も行われている。

メキシコのインディオからの聞き取りを続けて来た清水透は、「過去の記憶」と対話しつつ日常を生きること」を「歴史実践」と呼び、アカデミックな歴史学が紡ぎ出す「客観的な史実」の重要性を十分認めた上で、従来の学術的な〈知〉の枠組みからはみ出すところにある「文字をもたない民」の歴史実践の様式に注目する必要性を主張する¹⁶⁾。清水の問題提起を引き受けて、アポリジニのコミュニティでのフィールドワークを通して独自の叙述スタイルで「ラディカル・オーラル・ヒストリー」を実践したのが保莉実であり、彼は次のように問うている。「僕たち歴史学者がインフォーマント（情報提供者）の話聞くのではなくて、むしろ、インフォーマント自身を歴史家とみなしたら、かれらはどんな歴史実践をしているのだろうか¹⁷⁾。しかも、その「歴史家」たちが語るのは、例えば大洪水が起こったのは大蛇の仕業だといった「荒唐無稽」な物語である。保莉実の問いの鋭さは、異文化尊重の規範を受け入れる研究者は、アポリジニ自身がそのように主張したとして、恐らくその主張を「受け入れる」ことができる、にも関わらず学術研究者（歴史学者）という発話位置に立った途端に、そうした主張が許されなくなるのは何故か、という問題であった。保莉の提起した問いは厚重でここで全てに触れることはできないが、彼は「歴史とは何か」という問題を根源的に問い直すことを可能にする契機として、オーラル・ヒストリーの可能性に期待を示したのだった。

このように、社会の周縁を生きた人々の語りから、それまで沈黙のもとで隠蔽されてきた歴史を明るみに出し、既存の〈歴史像〉を書き換えるという意義の他にも、文字文化に馴染まない人々のオーラル・ヒストリーを通して、アカデミズムが自明のものとしている〈歴史観／歴史感覚〉が問い直される可能

性が開かれているのである。そしてそれは、オーラル・ヒストリーがまさに「オーラリティ」を相手にしていることとも関わってくる。

声の文化oral cultureと文字の文化literate cultureの心性の違いについて歴史的視座から検討したウォルター・オングは、文字の文化を生きる人々が、読み書きを知らない純粋に声の文化に属する人々にとって言葉がどのようなものなのかを想像することは非常に困難であることに注意を促していた¹⁸⁾。オーラル・ヒストリーの実践は、文字を持たない人々、文字を学ぶ機会を奪われた人々にとっての歴史を、想像するのも困難なものとして寄り添おうとする想像力が必要とされるのだ。

「オーラリティ」を主題化する上で、オングの議論からもう一つ指摘しておきたいのは、声の文化における記憶は身体的動作を伴うこと、また口頭で発せられる言葉は表情や語り口、身振りと一体のものであるという点である。「声の調子は、生き生きとしていたり、うわずっていたり、落ち着いたものだったり、いきりたっていたり、あきらめがにじんでいたりする。なんのイントネーションもなしに、ことばを声に出して話すことはできない」¹⁹⁾。

もちろん、オーラリティのこうした特徴は、文字テキストと比較した時に史料批判の困難さとして理解することもできる。しかしここでは、この点にオーラル・ヒストリーの強みが存する点に着目したい。それは〈語りの持つ潜在力〉とでも言えるものであり、日記や自叙伝といった他のパーソナル・ライフ・ドキュメントにも増して、口述史料が研究者を惹きつける要因となっている。録音機の力を借りて、初めて語り手の語り口を残した叙述を試みたときの中野卓は、次のように述べる。「『口述の生活史』という方法でなら、そういう人々〔華々しい表舞台でなく人知れず懸命に生きてきた人々：江口註〕への共感をともなった理解を実現しうる、と私は考えるのである。彼らの語りくちのままに読み取るとき、私自身がくりかえし経験したように、読者は話者たちとのあいだに間主観的な交流を持つに違いないからである」²⁰⁾。語り手と対面してそのオーラリティに触れる聞き取りは、文書史料からだけでは読み取ることの困難な、語り手の生きざまについて「共感をともなった理解」を可能にする道を開くのである。そしてそうした理解は、〈身体化された記憶／歴史の身体性〉への気付きへともつながる。保莉実はその

フィールドワークを通して、アポリジニにとって歴史とは、「日々の生活のあらゆる局面で見え、聴かれ、話され、感じられ、演じられ、検討される」ものであり、また「歴史は口頭で語られるだけではなく、「身体で演じられ」、「身体化された記憶は、具体的な身体表現によって歴史となる」ことに気付かされたのだ²¹⁾。

4. 教育学とオーラル・ヒストリー

ここまで、「記憶」、「歴史叙述の主体」、「オーラリティ」という論点に着目しながら、主に歴史学におけるオーラル・ヒストリー研究の動向を見てきた。翻って教育学の状況はどうだろうか。教育学関連学会の中では、オーラル・ヒストリーを主題とした学会誌の特集が組まれることはきわめて少なく、まだその手法を巡って議論は熟していないように見受けられる。とはいえ、既に幾つかの興味深い仕事がある。まず、社会学におけるライフヒストリー研究の影響を受けて教育社会学の中では口述史料の活用が見られ、例えば天野郁夫編『学歴主義の社会史』(1991年)は、学歴主義イデオロギーの人々の生活世界への浸透過程を跡づける上で口述史料を用いている。また、アイヴァー・グッドソンらの仕事が紹介され、授業研究や教師教育論の中で「教師のライフヒストリー」が注目されている²²⁾。他には、藤本浩之輔による、明治生まれの35人への聞き書きをまとめた『聞き書き 明治の子ども遊びと暮らし』(1986年)という稀有な著作もある。

このように貴重な仕事が既になされているとはいえ、先に触れた3つの論点に関わる研究はまだ多くは蓄積されてはいない。以下、その3つの論点に関わって、教育史研究の中でオーラル・ヒストリーを取り入れた近年の重要な研究を幾つか確認したい。

まず、「記憶」と「歴史叙述の主体」の問題がはっきりと現れる植民地教育史の分野では、オーラル・ヒストリーの導入が積極的に進められている。植民地教育史研究年報第7号は『植民地教育体験の記憶』(2005年)と題され、オーラル・ヒストリーに関する論稿が多数収められている。その「はじめに」によると、1990年代以降植民地教育史研究において口述史料に注目が集まった背景には、植民地支配・被支配関係者の他界、「性的奴隷者に貶められた女性たちの勇氣ある口述・証言の迫力や加害者の痛恨の告白

が与えた影響」等があったとされるが²³⁾、教育史の中で植民地教育史の領域において特にオーラル・ヒストリー研究が盛んになったこと理由はそれだけではない。宮脇弘幸は、植民地・占領地に関してはそもそも史資料が少なく、とりわけ「被支配の立場にある生徒は支配側(学校・教師)をどのように見ていたのか、またどのような気持ちで教育を受けていたのか、受け手の個人史の中で植民地教育はどのような位置づけをなされているのか、そのような歴史の断面は聞き取り等による口述で得るしかない」²⁴⁾と述べる。つまり、植民地教育においては、通常想定されている教師-生徒関係に加えて、支配者(植民者)-被支配者(被植民者)関係が加わることで、その非対称関係に一層敏感にならざるを得ないのだ。そこでは、支配者側の文書史料に基づく歴史像を問い直すために、口述史料に頼らざるを得ない。また、植民地時代・戦時中の歴史については、その事実認定を巡って論争的な事柄も多く、存命者の「記憶」が重要な意味を持つ²⁵⁾。このように、文書史料には残らない植民地時代の被教育経験について検証するためにオーラル・ヒストリーは重要性を持ち、また「記憶」と「歴史叙述の主体」を巡って問題が先鋭化しているのが、植民地教育史研究だと言える。

次に、「被教育経験の語り」を通して「戦後の記憶」の歴史化に取り組んだ研究としては、橋本紀子他編『青年の社会的自立と教育：高度成長期日本における地域・学校・家族』(2011年)が挙げられる。同書には、中内敏夫の社会史的方法を引き継ぐと共に、青年たちの経験が、時代の要請や親や教師ら働きかけるものの意図に拘束されながらも、主観的で独自な〈受けとめ〉があった点に着目し、その教育経験を描き出す上で口述史料を活用した論文が収録されている²⁶⁾。中内敏夫は、1970年代には大田堯らと共に取り組んだ民間教育史料研究会の中で聞き取り作業を進め²⁷⁾、また竹内常一・中野光・藤岡貞彦らと共に聞き取りも交えた戦後史『教育のあしおと』(1977年)を著すなど、早くから口述史料に注目していた教育学者の一人であり、この書は人々の産育や人間形成を広い視座から捉えようとする中内の姿勢が引き継がれる中で生まれもののだと言えるだろう。

ここで本格的な教育史研究の中に口述史料の活用が試みられた意義は非常に大きい。中村政則が整理した〈直接再現型〉(語りをそのまま忠実に再現する)、〈間接叙述型〉(ほとんどを聞き手(著作者)の

地の文章にして叙述する)、〈混合型〉の3区分²⁸⁾を踏まえてその叙述を見てみると、語り手の語り口をほとんど残していない〈間接叙述型〉だけしか試みられていない点は惜しまれる。また、聞き取りの対象者が複数名の場合、取り上げた発言が誰のものかが曖昧に記述されている場合もあり、固有名を持った語り手としてではなく、ある同一の経験をした人々の語りが匿名者として描き出される傾向が強いことも指摘できる。確かに、〈戦後の集合的記憶〉を明らかにする上では、「匿名者」たちのオーラル・ヒストリーは有効性を持ち得るであろうが、オーラル・ヒストリーを固有名を持った人々のマイクロ・ストリア(カルロ・ギンズブルグ)と捉えて、集合的記憶の中で効力を持つモデル・ストーリーやマスター・ナラティブ²⁹⁾とのズレに着目することも重要ではないだろうか。

「戦後の記憶」については、「戦後派教師」たちへの聞き取りをまとめた野々垣務編『ある教師の戦後史』(2012年)のような仕事もあり、また教師だけでなく、戦後の教育学を担った研究者への聞き取りも、教育哲学会や日本教育学会等によって進められている³⁰⁾。もちろん、「戦争の記憶」を巡っては、平和学習や歴史教育を通して教育現場における高齢者への聞き取りの伝統もまだ残っている³¹⁾。「戦争の記憶」に関しては、被害の語りに終始してその加害性が忘却されてきた傾向に対する危惧も存在しており³²⁾、こうした「戦争の記憶」「戦後の記憶」を教育実践、教育史研究の中に取り入れていく中で、既存の語りの強化・補強に終始しないように注意しなければならないだろう³³⁾。植民地教育史が提起した被支配者たちの「被教育経験の語り」を聴くことの必要性を引き受け、声の複数性を捉え、マイクロな生に寄り添いながら戦後教育史像を再構築していく必要がある。

5. 教育史の中にオーラリティを掘り起こす

最後に、「オーラリティ」という視座を教育史の中に組み込んでいくことの意義について考えたい。

横原茂は、その論稿「オーラル・ヒストリーと教育」の中で、フランスの農村における「夜の集い」の文化について論じている。「近隣に住む多世代の男女が暖炉の周りに集まって、語り手の話に耳を傾け

る「夜の集い」は、現代の家族(殊に核家族)と学校に二元化された教育のあり方とは異なる文化継承(ときに文化創造)のモデルであった³⁴⁾が、学校教育の普及に伴う文字文化の浸透と個人的読書(黙読)の一般化や1920年代以降のラジオの普及等の影響を受けて徐々に廃れていった。横原は、「夜の集い」に象徴される共同体の口承文化を、「[大人と子供の世代間関係]におけるコミュニケーションの一形態としてのオーラル・ヒストリー³⁵⁾」として捉えることを提唱し、現代の学校教育においても本格的にオーラル・ヒストリーを導入すべきではないかと提案している³⁶⁾。

「夜の集い」とは、共同体の記憶をく身体化された記憶として次世代へ継承するための文化装置であったのだろう。「オーラリティ」という視座は、もはや文字との格闘とイメージされる現代の教育の中にも、身体から発せられる声を媒介とした伝達・交流という側面が重要な意味を持ち続けていることを思い起こさせてくれる。そして何より、研究者が語り手の話に惹きつけられる中に〈語りを持つ潜在力〉を見てきたように、学習者にとっても、語り手と対面することはその相手に対する関心を惹起するだろう。河西宏祐は、大学の「戦後史」をテーマにした講義において、学生の歴史理解を容易にし、歴史への関心を引き出す上で様々な「証人」のライフヒストリーを聴くことの意義を強調している³⁷⁾。子どもたちが「学びから逃走」する時代において、もう一度世代間コミュニケーションを再生していくためには、教室という空間に閉じるか否かは別として、様々な場所でオーラリティが復権されることが必要なのではないだろうか。

そのような現代的課題を引き受けた上で、教育史研究の中でも、教育という営みの中に埋め込まれてきたオーラリティを掘り起こしていく必要があるだろう。耳を澄ましてみると、様々なところにオーラリティの存在を聴き取ることができる。例えば、「書くこと」の教育と一般に認識されている生活綴方の実践においても、その中には書く営みと書かれたものを読み合う営みが織り込まれていたであろうし、『山びこ学校』に代表されるその作品群に人々が惹きつけられるのは、その言葉の中に生き生きとした表情を持ったオーラリティの名残を読み取っていたからではないだろうか。また、子どもの頃に文字を学ぶことができなかつた人々の中から生まれた戦後の

識字運動の中からは、寿識字学校の大沢敏郎に代表されるように、書くことを深く突き詰める中で、逆説的に文字に頼らずに生き抜いてきた人たちのオーラリティの世界への深い理解が生まれていた³⁸⁾。

思い起こせば、明治期以来の近代的な学校という空間は、「読み書きそろばん」に基礎が置かれたことに象徴されるように、識字者の優越を価値づけ、方言の矯正などを通して人々のオーラルな世界の馴致を推進する場としても機能して来たのだった。現代における教育という営みの再生を模索する上で、そうした負の遺産を重く受け止めながら、教育史の中にオーラリティを掘り起こしていく必要があるのではないだろうか。

注

- 1) 本稿では、必ずしも歴史研究に対象を限っていないが、煩雑を避けて「口述史料」という表現で統一する。
- 2) ここでは「歴史修正主義」者のこと指す。
- 3) 桜井厚「[事実]から[対話]へ」『思想』第1086号(2010年)。
- 4) グイン・プリンス「オーラル・ヒストリー」ピーター・バーク編、谷川稔他訳『ニュー・ヒストリーの現在』(人文書院、1996年)131~132頁。
- 5) ボール・トンブソン著、酒井順子訳『記憶から歴史へ』(青木書店、2002年)。
- 6) 桜井厚『インタビューの社会学』(せりか書房、2002年)46~54頁。アメリカのオーラル・ヒストリーの歴史については、上杉忍「アメリカにおけるオーラル・ヒストリーの現状とその成果」歴史学研究会編『事実の検証とオーラル・ヒストリー』(青木書店、1988年)が詳しい。
- 7) 中野卓編著『口述の生活史』(御茶の水書房、1977年)。
- 8) 佐藤健二「ライフヒストリー研究の位相」中野卓・桜井厚編『ライフヒストリーの社会学』(弘文堂、1995年)。同書巻末には、その時点までのライフヒストリーの研究文献目録が掲載されている。
- 9) 倉敷伸子「女性史研究とオーラル・ヒストリー」『大原社会問題研究所雑誌』第588号(2007年)。第585号、第589号も含め、同誌では3回にわたって「社会科学研究とオーラル・ヒストリー」について特集している。
- 10) 日本政治学会編『オーラル・ヒストリー(年報政治学2004)』(岩波書店、2005年)、御厨貴編『オーラル・ヒストリー入門』(岩波書店、2007年)など。
- 11) 中村政則『昭和の記憶を掘り起こす』(小学館、2008年)13~14頁。
- 12) 成田龍一「中村政則『昭和の記憶を掘り起こす』、あるいはオーラル・ヒストリーと歴史学の刷新について」『UP』第433号(2008年)。
- 13) 同論文、48頁。
- 14) 成田龍一『「戦争経験」の戦後史』(岩波書店、2010年)序章・第4章。
- 15) 前掲、桜井厚「[事実]から[対話]へ」247~249頁。
- 16) 清水透「オーラル・ヒストリーの地平」『学術の動向』第12巻3号(2007年)。
- 17) 保莉実『ラディカル・オーラル・ヒストリー』(御茶の水書房、2004年)12頁。
- 18) ウォルター・オング著、桜井直文・林正寛・糟谷啓介訳『声の文化と文字の文化』(藤原書店、1991年)34頁。
- 19) 同書、211頁。
- 20) 中野卓「歴史的現実の再構成」中野卓・桜井厚編『ライフヒストリーの社会学』215頁。
- 21) 前掲、保莉実『ラディカル・オーラル・ヒストリー』56~59頁。
- 22) アイヴァー・グッドソン著、藤井泰・山田浩之編訳『教師のライフヒストリー』(晃洋書房、2001年)、アイヴァー・グッドソン&バット・サイクス著、高井良健一他訳『ライフヒストリーの教育学』(昭和堂、2006年)。その影響を受けた研究としては、塚田守『教師の「ライフヒストリー」からみえる現代アメリカ』(福村出版、2008年)、藤原顕他『国語科教師の実践的知識へのライフヒストリー・アプローチ』(溪水社、2006年)等がある。
- 23) 植民地教育史研究会編『植民地教育体験の記憶(植民地教育研究所年報7)』(皓星社、2005年)3頁。
- 24) 宮脇弘幸「口述を植民地教育史研究にどのように生かせるか」『植民地教育体験の記憶』15頁。
- 25) 歴史学研究会がオーラル・ヒストリーに関心を寄せるようになった背景にも、南京大虐殺の実態を巡る本多勝一のルポライターとしての仕事からの影響が大きかった。歴史学研究会編『オーラル・ヒストリーと体験史』(青木書店、1988年)。
- 26) 橋本紀子・木村元・小林千枝子・中野新之祐編『青年の社会的自立と教育』(大月書店、2011年)13~15頁。
- 27) 民間教育史料研究会『聞き書き資料』(1976-1978年)。
- 28) 前掲、中村政則『昭和の記憶を掘り起こす』14頁。
- 29) 桜井厚『ライフストーリー論』第7章「語りの様式」。
- 30) 教育哲学会の成果については、教育哲学会プロジェクト「教育学史の再検討」グループ(森田尚人編)『聞き

書 上田薫回顧録』(2009年)、同『聞き書 村井実回顧録』(2009年)にまとめられている。日本教育学会については、「戦後教育学の遺産の記録」と題して聞き取り作業が現在進行中である。

- 31) 最近発表された実践報告としては、神山知徳「戦争体験・戦後体験の聞き取り調査をどう指導したか」『歴史地理教育』第784号(2012年)など。
- 32) 酒井順子／ポール・トンプソン「日本におけるオーラル・ヒストリーの可能性」『記憶から歴史へ』所収。
- 33) この点、教育学にライフストーリー研究の導入を試みてきた倉石一郎による、高知県の福祉教員を関する研究は参考になる。倉石一郎『包摂と排除の教育学』(生活書院、2009年)。
- 34) 横原茂「オーラル・ヒストリーと教育」『島根大学教育

学部紀要』第42巻別冊(2009年)29頁。

- 35) 同論文、25頁。
- 36) 学校教育の中にオーラル・ヒストリーを取り入れた有名な事例として、米国ジョージア州のFoxfireという雑誌を刊行した学校の事例が有名であり、藤井大亮はその中に「コミュニティヒストリーの可能性」を見ている。藤井大亮「米国の歴史学習にみるコミュニティヒストリーへの取り組み」岡本智周・田中統治編著『共生と希望の教育学』(筑波大学出版会、2011年)ほか。
- 37) 河西宏祐編『戦後史とライフヒストリー』(日本評論社、1992年)。
- 38) 大沢敏郎『生きなおす、ことば』(太郎次郎社エディタス、2003年)。